

地政学という狂気にふれる詩の旅

～『詩の檻はない』第二版に参加させて頂いた経緯と想い～

林美脉子

2023年2月、2015年から「図書新聞」に毎月「世界内戦下の文芸時評」を10年近く連載しておられる文芸批評家・詩人の岡和田晃さんからお電話がありました。内容は「アフガニスタンのタリバン政権が、女性が詩を書くことを禁じ迫害しているので、西側に避難した詩人を支援するための詩を送ることになった。それで林さんも参加しませんか」というお声がけでした。その説明の中で「その詩人は、日本中の文学団体に要請をしたのだが、どこからも反応がなく、たった一か所「北海道詩人協会」の事務局長の柴田望さんが賛同を示し、柴田さんが中心になって編集作業をする」というものでした。

私がかねがね詩を含むあらゆる「文学団体」というものに懐疑的な考えを持っていて、どの団体や同人誌にも属さず、ずっとひとりで詩を書いてきました。何故ならば、団体・組織というものはある意味「ムラ社会」を形成していて、そこでは必ずヒエラルキーが存在し、そのムラの一員であることで「仲間意識」や「ステータスを得る」という力関係が生じることに對して、ある種のトラウマを持っているからです。

詩（文学）というものはそういうものから最も自由でなければならなく、中央集権的な文壇詩壇から遠く離れて自立すべきであって、岡和田さんが常々仰るところのG・Cスピヴァクが主張する「惑星思考（プラネタリティ）」であるべきだというのが、詩を書き始めてから変わらない私のスタンスでした。

数年前、岡和田さんと私は「北海道＝ヴェトナム詩集 1、II」に関して、メールで意見交換をしたことがあります。（その内容は岡和田さんが「フラジャイル」19号の19～20ページと、ウェブ・アフガンの「NO JAIL」のインタビューで非常に分かりやすく纏め言及されていますので、ご参照下さい（<https://webafghan.jp/siten077/>）

その意見交換の中で私は、1965～1974年の全学連運動と「ヴェトナムに平和を！市民連合（ベ平連）運動」の渦中を同時代人として過ごした立場から、この『北海道＝ヴェトナム詩集 1、II』には少しばかり懐疑的である旨を主張しました。

当時は学生を初めほとんどの国民が「(60年) 安保反対！ヴェトナム戦争反対！」のシュプレヒコールを叫び、蛇のようにうねる「フランス・デモ行進」を行い、国中が騒然とした興奮状態にありました。

その異様に興奮した時流に乗って出された『北海道＝ヴェトナム詩集』は、それを編纂し

た江原光太さんの素朴で善良な反骨精神に支えられたアンソロジーではありましたが、参加した誰もが似たような表現の作品を寄せ、学生運動やヴェトナム戦争の根本にある本質を真に理解しているかどうか疑わしい中で書かれた、一種のお付き合い的同情心から書いたビラ詩であるように私には読めました。(実際江原光太さんはそのあとがきで、「ビラ詩でもいいから何か出そうではないか」と書いています)。

確かにそういう思いが湧く時代背景ではあり、アジビラが悪いという訳ではないのですが、そこに書かれた作品の多くは、日本的抒情に落とし込まれることで良しとされる「美しき魂症候群」という予定調和の中で終結していて、参加した個々の人達が、大国の代理戦争場と化し、泥を被り血を流している生々しい現実にあるヴェトナムの人々の惨状に対して、どれほどの当事者意識を担保して書いているかが、私の中でひとつの疑問として残りしました。

この私の感想は、「フラジャイル」19号の岡和田さんの文中に引用される千葉宣一、戸沼礼二両氏の考え方と通底していました。つまり「ヒューマニティとセンチメンタリズムとは決定的に違う」という千葉宣一の言葉が、私には一番腑に落ちていたのです。

それで私は岡和田さんに、「あの『北海道＝ヴェトナム詩集』は、かつて戦争を賛美した「翼賛詩」の裏焼きと捉えることも出来て、ある意味でその逆張りの、日本人特有の「情緒的同調主義」の様相を呈しているように思える」と言いました。そして、「私は千葉宣一、戸沼礼二の立場を支持する」というようなことを主張していました。

そういう経緯があったので、私は岡和田さんのお声がけの電話に、「私がそういうことに対して批判的であることはご承知と思いますが……」とお答えし、岡和田さんもそれ以上のことは仰らずにその場は終わりました。

その後、私はいつか本に纏め出版しようと思いつきながら、30年間も実行することが出来ていなかった、インド・エジプト・中国一人旅（今般出版しました拙著『悠久の古代紀行「砂に呼ばれて」』(以下『砂に呼ばれて』)の編集作業に時間を取られてしまったのですが、「アフガニスタン」に限らず、日々苛酷に展開されるウクライナや中東、アフリカの現状を鑑みるに、それらの国のことはずっと頭から離れることがなく、『砂に呼ばれて』の「おわりに」で、この地方に対する私の原初的な思いを少し述べさせて頂きました。

そして8月15日、日本敗戦の記念すべき日に『詩の檻はない』初版が発行されたことを岡和田さんの「X」で知り、直ちにAmazonに注文をし、一気に読みました。

驚いたことにこのアンソロジーには「北海道詩人協会」という組織はどこにも関わってなく、柴田さんや岡和田さん、ウエップ・アフガンの野口壽一さん他、全く個々バラバラの方達が賛同し参加しているものだったのです。私は岡和田さんの言葉を、「北海道詩人協会が主体になって(その人達の作品を)編纂する」というふうに聞き間違えていた訳です。同時に岡和田さんから送信されてきた2024年8月27日の「茨城新聞」寄稿文を読み、私

は大きな判断ミスをしていたことがはっきりしました。

参加している方達は、「oo 詩人協会」や「oo 詩人クラブ」などの会員である方もいますが、その組織人としてではなく、一個人として参加しておられるのが読んでいて分かりました。先述した「フラジャイル 19 号」で、岡和田さんはこのような形を「特定の党派のようなものが見えません。色々な人がモル状というか、セミラティス（網目状交差）的ひろがりがある」と表現しています。

このような組織に縛られない自由な形のアンソロジーであるのなら、長い間アフガニスタンに行きたいと思っていながら、この国の混乱は旅をするには余りに危険続きでその思いを果たせずにきた私は、真っ先に参加していなければならなかったのです。岡和田さんの「茨城新聞」寄稿文をもっと早く読んでいれば、こういう誤解をせずに済んだのにと思いつつ、私は深い反省と後悔に襲われていました。

拙著『砂に呼ばれて』の「はじめに」に書きましたように、40 年近く前に私がインドやエジプトを一人で彷徨し、それに飽き足らずに天安門事件の起こる 3 年前に中国ひとり旅を実行したのは、ひとえに仏教伝来の道をこの足で辿りたいと思ったからです。それは父の葬儀で聴いた 5 人の僧侶が唱和した荘厳な読経の声に触発され、鳥肌がたつように湧き上がってきた「自分はどこから来たのか」という疑問を、この肉体を通して理解したいという発願によってでした

なぜならば、コトバにならず胸の裡に溜まっている得体の知れないモノに形を与え、それを「言葉」（詩）として表出させるためには、血や肉の痛み（悼み）を身をもって通らなければならないと直感しているからです。それは頭（知識や理論）の理解だけでは果たせない、形にならない魂の中にだけあるナニモノかを、肉体を通した「言葉」として受肉し、身体を持った「詩」にするためには必須のことであると信じてのことです。

身を痛め泥を被り、「釈迦の生まれた地」にこの身を立たせてその空気を吸い臭いをかぎ、そこに生活する人々のざわめきや住む人との触れあいを体感し、時には嫌な思いや痛い思いをして、私が感受した読経の中に潜む「詩」（「詩」はそもそも「言」の「寺」と書きま

す）のありかを確かめたい。
私は「釈迦の生まれた地に行こう！　そして人類を人類たらしめた世界四大文明発祥の地を踏破しよう！」と強く決意し、気が付くと大きなバックパックを背負い、たったひとりでインド・エジプト・中国に、宿や交通機関の予約もなしに無謀にも旅立っていました。

しかし当時も、人類の農耕生活が始まった「肥沃な三日月地帯」であったメソポタミア文明の地は数度の中東戦争の混乱にあり、そこを断念せざるを得ない状態であったので、その地域が落ち着くまで中国のカラコルム山脈を越えカイバル峠からアフガニスタンのカブ

ールに至り、パキスタンを経てインドに出るといふ、極めて苛酷な難所を踏破する計画を立てました。

なぜアフガニスタン、パキスタンなのかという、その地帯はガンダーラ仏発祥の地だからです。またカイバル峠は、かのヘレニズム文化をもたらしたアレキサンドロス大王の東征を阻んだ険しい峠です。出来ればその近くにあるサマルカンドまで足を延ばせば、東西文化とイスラムの混合する場所を実地に見聞出来るに違いない。私の無謀な冒険心は果てしなく続きました。

残念ながらその計画もソ連のアフガニスタン侵攻で無残にも崩れ、その後のアメリカの介入と撤退、その混乱に乗じて勢力を持ったアルカイダが台頭して、この地もまたメソポタミアの地と同じく泥沼に転じ、今は絶対的男性権力中心のイスラム原理主義である、武装暴力勢力タリバンに占領されてしまった。

ついに行くことが出来なかったこの二つの地の悲惨な地獄の有様を、ただ TV 画面や新聞、ネットなどで見ていることしか出来ない自分……。

私は強く『詩の檻はない』に参加しなかったことを悔い、岡和田さんの再度のお誘いで 2023 年 10 月 15 日横浜で開催された朗読会にリモートで駆け込み参加をし、つたないながら「溶けるサニ」という作品を朗読させて頂きました。そして、岡和田さんや柴田望さんにお手数をお掛けして、この作品を『詩の檻はない』の 2 版に加えて頂いたのです。

現地に行くことが叶わなかった代わりに、私は NHKTV で放映された「BS 世界のドキュメンタリー」や「デジタルリマスター版・新映像の世紀」「映像の世紀プレミアム」などのドキュメンタリー番組を録画し、枚挙にいとまがないほど繰り返し視聴しました。

記憶に残る幾つかの例を以下に挙げると

- ・パキスタンの娘の売買＝子どもを含めた若い女性の性や臓器の売買
- ・インドの名誉殺人＝カーストの下の者と結婚しようとする娘をその親族が殺しても罪にならない制度
- ・サウジ王国の謎（仏制作）＝万引きをしたニカブを被った女性を、裁判もなく公開処刑広場に引きずり出し、直ちに殺害。広場には処刑後の血を洗い流す立派な排水口が設置されていて、そこには前日処刑された人の血跡が残っている。「私はやっていない！」と叫ぶ女性の声が突然途切れた瞬間が、今も私の耳から離れない
- ・「ムクウェゲ医師（2018 年ノーベル平和賞受賞）の戦い～コンゴ性暴力の犠牲者を癒す（2015 年ベルギー制作）＝膣に銃口やナイフを入れられ膀胱まで裂け、常に尿が漏れ続ける女性を医療設備もない所で手術する医師のムクウェゲ氏は「2 歳の女の子さえ犯されていて、女性の体が戦場になっている。それは戦費を使わずに済む最も安上がりな勝利の方法なのだ」と語る

・塙の中の自由～アフガニスタンの女性刑務所(2012年)・プリズンシスターズ(2013年)
=男性と話をしただけで刑務所に入れられ、そこで友達になった女性が後に石打の刑に処され殺される。石を避けうづくまる女性を立てて囲み、笑いながら石を投げたり腕組みをして見ている若い男性たちの群れ

・映像の世紀プレミアム～世界を変えた女達=2014年ノーベル平和賞受賞者マララ・ユスフザイの国連スピーチ「タリバンの銃弾は私たちに黙らせることは出来ませんでした。私の生き方は少しも変わっていません。むしろ弱さや恐れ絶望は消え、強さと勇気が生まれました」

・「ベールの詩人～声をあげたサウジの女性=男性詩人が最高に尊敬されるアラブ世界で、男性だけで開催される詩祭・コンペティションに、初めてベールを被った女性が死を覚悟して出場、自作詩を朗読した(2017年ドイツ制作)

・山の民クルド人の孤独=イラク北部に与えられたクルド人自治区をISが襲い、クルド人のヤジリ教徒を虐殺、自治区も略奪され300万人の難民が発生、ISは何千人もの女、子どもを誘拐しレイプ、5000人のクルド人の男性を処刑したジェノサイド(2018年イギリス制作)

と、枚挙にいとまがないほどです。

実は私はこの地に行けなかった代わりに、「アフロ・ユーラシアの世界史」という勉強会に10年間参加し、中東を含めてこの地政学的に地球上で最も巨大な大陸の歴史を勉強してきました。それは島国の日本からは想像の出来ない血で血を洗う民族興亡の歴史の連続で、恨みと憎しみ、復讐の部厚いレイヤーを作り、簡単には解きほぐせない幾重にも絡んだゴルディアスの結び目となり、断ち切ることさえ不可能な暴力の連鎖を形成し、加害と被害の目まぐるしい反転を重ねて多くの民族を苦しめ続けています。そしてこの今現在も人類史上最大のナチスの虐殺(ホロコースト)の被害者と信じていたユダヤ人国家イスラエルが、あつと言う間にパレスチナ人を虐殺する加害者となっている。ここでも加害と被害のどんでん返しが起こり、それは人を人とも思わない大国の身勝手なふるまいが遠因となっていることが、今、白日のもとにさらけ出されています。

このようなただただ絶句するしかない世界情勢の中で手にした『詩の檻はない』のソマイアさんの序文と詩作品は、私が憧れながら行けないでいるこれらの地の苦悩を全身で背負い、女性が教育を受けることや詩を書くことへのタリバンの弾圧に命を懸けて抗議する、怒りと尊厳のある、力に満ちたものでした。

「タリバンが詩を制限する命令を出したとき、私の世界がすべて崩壊しました」と書く彼女は、その苦悩をたった一人で身に受け、「検閲と詩的芸術の弾圧に反対する詩を書くよう世界中の詩人たちに呼びかけ」たのです。

多くの賛同者の尽力で来日した彼女は、2023年12月19日に開催された横浜ことぶき協

働スペースでのシンポジウムで、「書くことを許されなければ死の方を選ぶ」と決然と言い切りました。

私はリモートではありましたがその言葉を聞いた時、ここまで言える詩人が今の日本にはいるだろうかと驚愕し、命を懸けたソマイア・ラミシュさんの詩への愛と勇気を全身で受け止めました。当事者の必死の叫びが直接私の魂に届いたのです。このような「ヒューマニティに満ちたリアルな叫び」を、私はかつて聞いたことがあっただろうか。

私は今こそ彼女の呼びかけに応じなければならないと強く決心しました。

私は「ウェブ・アフガン」という情報サイトがあることも知らず、「バームダード」の存在も知りませんでした。しかし、長い間ひとりでその地域への関心を持ち続け、40年間もその地を踏みたいと願い続けてきましたが、やっと同じ思いで活動する人たちに出会ったような気がします。

そして今、明るい希望に満ちた日野あかねさんの表紙・絵に彩られた『ソマイア・ラミシュ詩集(わたしの血管を貫きめぐる、地政学という狂気)』を手にして、ソマイアさんの「昨夜、通りで誰かが神を売りに出した(18)」という一行に出会い、再び慄然としています。なぜなら私も自分の第八詩集『タエ・恩寵の道行』(2017年書肆山田刊)に収録した作品「鬼胎の月」に「朝が来る前に/地球を/神に売りに行く/外れの喉はかみ合わず/(以下略)」というスタンザを書いているのです。

この言葉を今ソマイア・ラミシュさんに捧げ、私の『詩の檻はない』2版に追加参加させて頂いた経緯と想いをここに述べさせて頂きました。これからも世界の動向から目を離すことなく、微力であるかもしれませんが、言葉の力を信じて私は私なりに「自分の詩の旅」を続けていきたいと思っています。

(2024年12月20日札幌にて)